



近藤さんの家族構成は、お姉さんが2つ上で、弟が5つ下。特に弟は東京で音楽の道を追求しており、1ヶ月に1回のペースで曲とミュージックビデオをリリースしている。その活動は近藤さんにとっても非常に印象的で、弟の曲は「いい曲」と評価している。音楽に対する近藤さん自身の関わりは、学生時代から続いているようで、その背景にはお母さんや家計、周囲の影響が大きいと語っている。お母さんは教育方針として「親が教えない」というスタンスを取っていたが、それでも音楽は近藤さんの生活に密接に関わっていた。中学校や高校の演奏会で音響スタッフとして働いた経験もあり、そのような場で機材を運んだりしていた。



人には瞬時に解ける。その屈辱感は、彼にとつて新たな試練となった。しかし、その厳しさが彼を成長させる糧ともなった。忙しさや疲れもあったが、それは彼が真剣に数学、そして人生に取り組んでいた証拠である。数学という領域での挑戦は、近藤さんにとつて、自己を試す場であり、また新たな自己を発見する場でもあった。それは、彼がこれからのような道を選ぶにせよ、貴重な経験となることでしう。そして、その過程で感じた疲れや屈辱も、彼が次に進むステップにおいて、きつと力となる。近藤さんの大学院を卒業した後のキャリアは、数学からコンピューターの世界へと舞台を移した。初めての仕事は「三」という会社で、当初はコンピューターについてほとんど知識がなかった。「モアドレス」という基本的な概念すら知らない状態で、会社説明会と一次面接に参加する。その後、富士通研究所という会社で面接を受けるも、最終的には「協調性がない」という理由で落とされる。この時期にはすでに大学院時代から付き合っていた奥さんがいたが、仕事の厳しさによってプライベートはなかなか充実していなかった。「三」での初めの

富士通研究所という会社で面接を受けるも、最終的には「協調性がない」という理由で落とされる

仕事は、大変な炎上プロジェクトに参加する形となった。その後、「三」のパッケージ「シングワークス」を担当するが、本心ではあまり面白くないと感じていた。一方で、数学の研究に自由に取り組む時間ができ、それが唯一の楽しみであった。プログラムやアプリケーション開発の「楽しさ」が最初は理解できなかった近藤さん。しかし、物作りが好きだという建前を通して仕事を続け、徐々にその面白さを感じ始める。近藤さんのこの時期は、数学という厳格な領域から、より多様で応用範囲の広いコンピューターの世界へと移行する過程であり、その中で多くの挫折と成長

を経験している。それは新たな舞台での「一つの流れ」であり、これからのような道を選ぶにせよ、その経験は彼の人生において貴重なものとなるでしょう。近藤さんのキャリアは、初めての仕事で「補佐」の役割に回されたことから、サーバーインフラエンジニアとしての専門性を築くまで、多くの変遷を経た。最初は何も分らない状態で、家に帰ってはメールの仕組みなどを一生懸命勉強する日々だった。しかし、その努力が実を結び、「12年でサービスを形にしていく。その後、台湾のプロジェクトに参加し、新たな経験を積む。同時に、勉強会でAIや機械学習に触れ、そ

の面白さに目覚める。特に、りょうちやんとの出会いは、外の世界を見せてくれた大きなきっかけとなった。そして、奥さんの病気をきっかけに福岡に帰り、エンジンニアとして新たな仕事に就く。当初はマネージャーになるつもりはなかったが、現在はそのような役割を担っている。近藤さんのこれまでの20年間は、感覚も変わり、多くのことを学び取ってきた。それは、一つ一つの出来事や人々との出会いが、彼自身を形作っている証拠である。何も分らなかった頃から、今では多くの人に影響を与える立場になっている。それは、彼自身の努力と、周囲の人々との繋がりによって成し得たことであり、その成長過程自体が、一つの大きな「価値」とであると言えるでしょう。